

## 鄭振鐸の香港流出文物購入事業における姿勢についての一考察

松 村 茂 樹

はじめに

故宮博物院の長老であった莊巖（一八九九—一九八〇）の回想録『山堂清話』（一九八〇・台北故宮博物院／邦訳に筒井茂徳、松村茂樹訳）に、遺老が語る故宮博物院（一九八五・二玄社がある）には、学術的叙述と共に、故宮にまつわるさまざまなエピソードがちりばめられており、楽しい読み物という側面も有しているが、中でも「三希」をめぐる逸話はとりわけ興味深く、筆者も興奮すら覚えつつ読んだものであった。少々長くなるが、ここに引用しておこう。

いわゆる「三希」とは、王羲之の書いた「快雪時晴帖」、その子王献之の書いた「中秋帖」および甥の王珣の書いた「伯遠帖」であり、この三つの文物はいずれも晋朝より流伝してきた三大書家の稀代の名跡である。清の乾隆帝はこの「三希」を手に入れると、ことに珍重し、また特別に一まとめにして養心殿の西暖閣内に置いた。同時にこの三つの書法の珍宝を貯蔵するこの部屋に、特に「三希堂」と命名したのである。「ちやうど一般の人が物を収蔵する三齋館に似ている」。また、後に乾隆帝は宮中に存する歴代の古人が書いた名跡を刻して法帖を作り、それに「三希堂法帖」と題している。

この「三希」の中でも、乾隆帝はとりわけ王羲之の「快雪時晴帖冊」をこのんだ。彼はこの一帖を手に入れて以来、毎年寒くなつて

初雪が降ると、必ず取出して鑑賞したものである。さらに装訂した周囲には、詩を作って書きつけた。こうしたことを四十数年も続け、ずっと中断することはなかった。この国宝は宣統帝の荷物の中から見つけ出されて以来、現在に至るまで国立故宮博物院によって珍藏されてきた。外双溪（台北市郊外、現在の台北故宮博物院一帯の地名）に来てからでもすでに数回公開陳列されているので、きつと読者の中には何回も鑑賞なさった方もあらうと思う。他の「二希」の方は、宣統帝の出宮以前にすでに彼の庶母によってひそかに持ち去られ、さらに転売されて民間に流出していた。これを買ったのが定興の郭世五（郭葆昌）先生である。郭先生は当時の北京の大収蔵家であり、とりわけ陶磁器を深く研究していた。……（中略）……郭先生は生前より遺言を定め、自分の死後は収蔵している「二希」および全部の陶磁器をすべて故宮博物院に寄贈したいと言明していた。今でもよく憶えているが、民国二十四年（一九三五）、私がイギリスのロンドンの展覧会に古文物を護送するためにほどなく北京を発とうとしていた時、郭世五先生は秦老胡同の自宅で私のために送別の宴を開いて下さった。その時、故宮博物院の院長馬叔平（馬衡）先生および古物館の館長徐森玉（徐鴻宝）先生も一緒に招待されていた。酒宴の後、郭先生は収蔵している「中秋帖」と「伯

「遠帖」の二つの世にも稀な珍宝を上機嫌で取り出し、私たちに鑑賞させて下さった。そして自分の死後はそれらを故宫博物院に寄贈して全国の同胞の鑑賞に供するようすでに遺言を定めてあると述べられたのである。民国三十四年（一九四五）、抗日戦争勝利後にはこの老先生はもはや亡くなられていたが、彼の子息ははたして父親の遺言を承けつぎ、すべての陶磁器を故宫博物院に寄贈された「残念なこと」にこれらの陶磁器は急いで南京に運ぶの間に合わず、ために政府とともに台湾に移ってくることはできなかった」。しかし、郭老先生が生前に収蔵していたあの「二希」は、彼の子息が寄贈品の中に加えなかったために、今の台湾の故宫博物院には結局「三希」のうちの「一希」——王羲之の「快雪時晴帖」のこの稀代の珍宝しかない。これはまことに遺憾に思われることである。

ここにあるように、「三希」のうちの「一希」つまり「快雪時晴帖」は現在、台北故宫博物院にあるが、結局台北故宫に収蔵することができなかった残りの「二希」つまり「中秋帖」、「伯遠帖」と言うのと、周知の通り現在、北京故宫博物院にある。つまり共産党政府が手に入れたのである。

共産党政府が「二希」を手にした経緯は知る人ぞ知るのみで、一般にはあまり知られていなかった。だが一九八四年、学林出版社より劉哲民編注『鄭振鐸書簡』（以下『書簡』と略称）が出版され、実は魯迅、茅盾などと共に中国の近代化を模索した文学者であり、共産党による中華人民共和国成立後は国家の文化政策担当者として重きをなした鄭振鐸（一八九八—一九五八）が、「二希」入手に大きくかわったことが明らかとなったのである。

『書簡』には鄭振鐸が出版事業家の劉哲民に与えた手紙百六十七通が翻字されて収められており、うち一九五一年十月三十一日付のものに、

伯郊兄はもう上海に着きましたか？もしかしたら彼はすでに北京に向っているかも知れませんか。彼に会ったなら、どうか一言「郭

家の「一希」（これは「二希」の書き誤りと思われる）は、どうあっても手立てを講じて買わねばならない」と伝えて下さい。彼は次のことを胡惠春（銀行家、香港在住）と相談できないものでしょうか。本年中に郭氏はまず債権主と交渉し、三か月あるいは半年、（担保決済を）繰り越してもらおう。あるいはだれか金持ちの友人にたのんで、先に（担保になっっている「二希」を）請け出し、我々が来年購入し、利息を加えてその友人に支払う。なぜなら今年のうちには、おそらく「お金」の都合をつけ、この「二希」を買うことは難しいと思われるからです。

という一節が、また、同年十二月十三日付のものに、「二希」は政府によって購入されました。これは良い知らせです。伯郊兄が手紙を寄こし、このことを詳しく報告してくれました。すべての「国宝」は、我々が勝ち取らねばなりません。

という一節があり、鄭振鐸が伯郊すなわち徐伯郊に委嘱して、郭世五の息子である郭昭俊から「二希」を購入せしめたことがわかったのである。

この二通の手紙が書かれた一九五一年十月から十二月にかけて、鄭振鐸は丁西林、李一氓を正副団長とする中国文化代表団の一員として、インド、ビルマ（現在のミャンマー）を訪問しており、これらの手紙も前者はインドのニューデリーから、後者はビルマのラングーンから出されたものである。おそらくは、このインド、ビルマ訪問のため、イギリスの客船・Sargola に乗るべく赴いた香港におけるわずか六日の滞在期間（十月二日〜七日）に、鄭振鐸は「二希」が売りに出されていることを知ったのであろう。だが、自らはまもなく外国へ行かねばならない身、購入活動をするゆとりがない。よって、徐伯郊にこのことを委嘱したものと思われる。

徐伯郊は名を文炯といい、伯郊はその字である。北京輔仁大学および日本の東京帝国大学、慶応義塾大学に学び、卒業後は銀行界に身を投じて、上海市銀行經理、広東省銀行香港分行經理などをつとめた。

彼の父は故宮博物院古物館館長をつとめた後、中華人民共和国成立後は上海博物館館長などの要職を歴任した徐鴻宝（一八八一—一九七一）で、鄭振鐸と親交を有する間柄であった。よって、徐伯郊は幼少の頃より鄭振鐸の知遇を得ており、徐々に信任をも得るようになったのである。ちなみに徐鴻宝（字は森玉）は、前に紹介した『山堂清話』の著者・莊巖が故宮博物院古物館科長をつとめていた当時の上司にあたり、郭世五が「二希」を披露した宴会にも莊巖と同席している。この師弟関係まで結んでいたという徐鴻宝、莊巖の二人は、後に片や大陸に残り、片や台湾に渡ることとなるが、台湾に渡った莊巖が手に入れることのできなかった「二希」を、結局は徐鴻宝の息子が動くことによって大陸に帰さしめたことに、二人の残からぬ因縁を感じずにはいられない。

さて、『書簡』出版により、以上のようなことが世に明らかとなったのであるが、当時、共産党政府が香港で購入した国宝級の文物は、ひとり「二希」にとどまっておらず、たとえば唐の韓滉「五牛図」、宋の李唐「採薇図卷」などの名画をはじめとする多くの文物も香港ルートで購入したものであると言われてきたのである。しかしながら、それを裏付ける資料がなく、はっきりしたことはわからなかった。ところが最近になって、新資料が公刊され、これらの文物も「二希」と同じく、鄭振鐸—徐伯郊ラインにより、香港で購入されていたことがわかったのである。その新資料とは、『書簡』と同じ劉哲民の編になる『鄭振鐸先生書信集』（一九八八・上海古籍出版社／以下『書信集』と略称）で、この中に、当時、鄭振鐸が徐伯郊に与えた手紙十三通が、そのまま影印する形で収められており、鄭振鐸が徐伯郊に送った生々しい文物購入指令が白日のもとにさらされることになったのであった。この手紙にいち早く反応したのが『鄭振鐸論』（一九九一・商務印書館）、『鄭振鐸年譜』（一九八八・書目文獻出版社／以下『年譜』と略称）などを著している上海外国語学院の陳福康氏である。陳氏はこの手紙からわかった事実をもとに、御自身の広い見聞をおりまぜて『国宝的回

帰』（一九九二・『文学報』第五八八期所収）という一文をものし、鄭振鐸と徐伯郊の「壮举」を紹介している。

さて前置きがかなり長くなってしまったが、本稿ではこの『書信集』に見える鄭振鐸が徐伯郊に与えた十三通の手紙、および『書簡』中の鄭振鐸が劉哲民に与えた手紙を見ながら、当時の鄭振鐸がどのような姿勢で徐伯郊に香港での文物購入をさせていたのかを検証して行きたい。このことにより、当時の一大事業であったいわゆる香港流出文物購入の実態を明らかにすることができると共に、鄭振鐸の知られざる側面をまかしま見ることができると思う。

### 一、十三通の手紙の発信時期

『書信集』中の鄭振鐸が徐伯郊に与えた十三通の手紙は、編者の劉哲民によって、一九五一年から五二年初頭に書かれたものとされている（『書信集』編後）。だが、これには疑問の目を投げかけないわけにはいかない。前出の陳福康氏によると、この十三通はすでに封筒が失われており、便箋には月日のみしか記されていないため、実のところ何年に書かれたものか特定することはできないという。ただ、陳氏は内容から、このほとんどが一九五二年に書かれており、もしかしたら一九五三年に書かれたものもあるかも知れないと推定されている。その根拠までは何わなかったが、筆者も陳氏と同様の感触を持っている。なぜなら『年譜』の一九五二年七月三十日の条に、鄭振鐸がこの日手に入れた袁勵准『中秘日録』の抄本に題跋をものして、

私は今まさに溥儀が持ち出した故宮書画の搜集に従事しており、これを得たなら十分その調査に資することができる。

と述べていることが記されており、この一九五二年七月三十日ごろには「溥儀（宣統帝）が持ち出した故宮書画」つまり香港に流出していた法書名画を、徐伯郊に命じて搜集、購入させているまっ最中であつたことがわかる。また、前述の通り、鄭振鐸は一九五一年十月から十

二月にかけてインド、ビルマを訪問しており、そのため同年九月二十日午後六時ごろから一九五二年一月二十四日午前までは北京を留守にしている。だが劉哲民が一九五一年十二月十五日のものを目している手紙には「一日も早く北京に郵送して下さい」とあり、鄭振鐸は北京からこの手紙を出していることが窺えるし、同じく一九五一年十二月二十三日のものを目されている手紙は、「北京北海南門外團城 電話(四)二五二〇」と下部に印刷されている中央人民政府文化部文物局の公用便箋が用いられており、これは明らかに北京から出されたものであることがわかる。つまり、劉哲民が一九五一年に書かれたものと審定している手紙を、そのまま一九五二年に書かれたものとする、北京にいた鄭振鐸が「今まさに溥儀が持ち出した故宮書画の搜集に従事して」おり、熱心に徐伯郊に手紙を与えて指示を出していたということになり、辻褄が合うのである。よって本稿では、この十三通のほとんどが一九五二年に書かれたという前提のもとに論を進めて行くことにしたい。

#### 一、香港流出文物購入の方針および鄭振鐸の熱意

さて、前提の話はもうこのぐらいいにして、この十三通の手紙の内容を見て行くことにしたい。まず、三月二十七日付の手紙に、鄭振鐸がこの事業の基本方針および意義を述べている部分があるので訳出しておこう。

私達の購入の重点が、やはり古画（明以前）と善本書籍にあるのは、それらが散失しやすいからです。古器物、つまり銅瓷、玉器などは、とくに重要なものでない限り、しばらく購入しない方がいいでしょう。……（中略）……兄は人民のため、多くの極めて重要なものを獲得して下さいましたが、これは国家における功績であり、ただ我々があなたに感謝しているというだけのことではありません。この仕事は、めんどろなことでありますが、成果はとても大

きいものですし、効果もとても大きいものです。ぜひ、継続して努力し、めんどろをいとわないで下さい。人民のために奉仕するには、必ず全心全意をもってあたねねばならないのです。革命の仕事はもっとめんどろなことです。でも困難に出会うことなく、すぐに成功することができることなど、とても少ないものでしょう。困難があればあるほど、試練の機会を増やすことができ、自信を強めることができるのです。

なんとも熱意に満ちた語りかけである。また、四月八日付の手紙には次のような一節も見られる。

購入の仕事において、小グループを作りたいと思います。兄が交渉、鑑定ならびに価格協議を担当し、中国銀行の沈（鏞）經理および温康蘭の二人が支払いなどを担当して、あなた方三人によるグループを結成するのです。そうすれば責任が重くなりすぎることを防ぐことができるでしょう。温康蘭同志のところには、すでに廖承志同志から通知がいつています。沈經理のところには、（広州市の）朱（光）副市長から通知してもらおうのが最も良いでしょう。温康蘭がどのようにしてあなたと意見をとりかわすかは、まず広州の華南統戦部長である饒彰楓同志と連絡をとってみるべきでしょう。

なんと、当時中国共産党中央統戦部副部長で、後には中日友好協会会長として対日友好に重きをなした廖承志（一九〇八—一九八三）もこの事業に一枚かんでいたのである。ただ、共産党側の廖承志がこの事業に加担していたことは何ら不自然なことではなく、とりたてて驚くには値しないかも知れない。だが、中華人民共和国成立後、台湾に渡り、国民党の政権下に生きた人物が、秘密裏にこの事業に加担していたとしたら驚きであろう。実はそんな驚くべき加担者が著名画家の張大千（一八九九—一九八三）なのである。八月二十五日付の手紙を見よう。

香港に戻ってから、張大千と多く連絡をとって下さい。そして、すべてのアメリカにある名画、更には日本にあるものを、彼の関係

を通じて持ち帰ることができれば最も良いのですが。これは一つの大事です。彼の努力を望むところです。……(中略)……この事は、はなはだ重要で、かつ機密とせねばならないことです。どうか朱市長と相談の上、ざっくばらんに大千と話し、かつまた彼に頼んで「彼を励まして」なんとか味方についてももらえないものでしょうか？

鄭振鐸はこれは「大事」であり、「機密」とせねばならないと言っているが、これは決して大げさな表現ではなく、このことがもし国民党側に漏れたら、張大千は台湾で生きて行けまい。だが、こんな鄭振鐸の熱意が通じたのか、張大千はどうやら鄭振鐸に力を貸していたようだ。その助力の内容は定かではないが、一月二十九日(おそらくは一九五三年であろう)付の手紙によると、張大千コレクションの画三点が鄭振鐸つまり共産党政府側に渡っているし、更にその後、張大千は「東西南北只有相隨無別離」(どこにゆこうと離しはすまいぞ)という印文の収蔵印まで押して愛蔵した顧闈中「韓熙載夜宴圖」をはじめとするとおきの名画を、国民党ではなく共産党側に売却しており、この売却ルートも鄭一徐ラインに他ならないと思われるため、張大千の鄭振鐸への助力は必ずやあったと考えるとまちがいはなからう。

ちなみに、「韓熙載夜宴圖」の売却時期であるが、楊繼仁『張大千伝』(一九八五・文化芸術出版社)の末尾に付されている「張大千年譜」は一九五一年としているが、前出の陳福康『国宝的回帰』は一九五三年より後としている。これはおそらく後の方が正しいと思われる。なぜなら前出の莊嚴『山堂清話』に、

民国四十四年(一九五五)の春、張大千先生が香港から台湾にこられた。……(中略)……彼はいくつかの書画の名蹟を携行されており、いずれも大風堂(張大千の堂号)が戦後新たに手に入れた珍しい物であった。画では北宋の董源の「瀟湘図巻」や五代の画家顧闈中のわずかに現存する名作「韓熙載夜宴圖巻」があり、書蹟としては北宋の黃庭堅の「伏波神祠巻」があった。

という一節があるからで、莊嚴の記憶が正しいとするならば、一九五五年春の時点では、「韓熙載夜宴圖」はまだ張大千が持っていたことになる。だから、「韓熙載夜宴圖」の共産党政府への売却時期は、陳氏の一九五三年より後という説をさらに発展させて、一九五五年春より後ということにしておきたい。

このように多くの人々の助力を得て、この香港流出文物購入事業は進んでいたようだ。そして、十二月二十三日付の手紙の末尾部には、あなたの香港での仕事は、まちがいはなくとも大きな成果を有するものであり、我々は皆とてもあなたに感謝しております。国家、人民のため、すでに国外に流出した「重宝」を獲得する、これは一大事業です。尚一層の御努力をいただき、更に大いなる成功を得られんことを願っております！

とあり、一定の成果が得られたことがわかると共に、鄭振鐸が徐伯郊の働きに対して大いに満足しており、今後その手腕を頼みとしていたことが窺える。

### 三、鄭振鐸から購入を指示されたものと不購入を指示されたもの

鄭振鐸は大いなる熱意をもって香港流出文物購入事業にあたったが、こういった事業は熱意があるだけでは決して遂行し得ないものである。なぜなら購入の対象が書画をはじめとする文物なのであるから、相当な鑑識眼を有する人でないと、真贋入り乱れる多くの文物の中から、精品をよりすぐって購入することなど不可能であるからだ。だがどうやら鄭振鐸はこの鑑識眼を有していたようで、鄭一徐ラインによって購入されたものは、現在もおおむね高い評価を得ている。ここでは十三通の手紙の中から、鄭振鐸が徐伯郊に「購入を指示したものの」および「不購入を指示したものを」書画に限ってそのままリストアップしておきたい。このことにより、鄭振鐸の書画鑑識眼の一端が窺えると共に、当時の流出書画の概容も窺えることと思う。

購入を指示したもの

- 李唐
- 馬遠
- 王季遷コレクション
- 張萱「唐后行從図」(盧芹齋コレクション)
- 以上三月二十七日付
- 馬遠「踏歌図」(「疑問あり」と注記)
- 朱沢民「秀野邸」
- 宋徽宗「翎毛四段」
- 趙孟頫「双松平遠」
- 周砥「銅官山色」(以上五点、周遊コレクション)
- 宋人「湖山清曉図軸」(陳仁濤コレクション)
- 李唐「採薇図」
- 毛益「牧牛図」
- 宋人(李嵩)「觀潮図」
- 商琦「秋山図」
- 方從義「武夷放棹図」
- 董源「溪山行旅図」(以上二点、王南屏コレクション)
- 米友仁「雲山図」
- 趙孟頫「墨蘭卷」(「摹」<sup>◎</sup>と注記)
- 司馬光「通鑑稿」
- 吳允文「自書詩卷」
- 張遜「双鈞竹卷」(以上三点、譚敬が出している抵当物品)
- 王季遷コレクション
- 盧芹齋コレクション
- 「宋元集絵冊」三本(盛蘋臣コレクション)
- 余協中コレクション
- 王文伯コレクション
- 「修竹遠山」(張大千コレクション)
- 日本人コレクション
- 以上四月八日付
- 董源「溪山行旅図」
- 日本人コレクション
- 李唐「伯夷叔齊卷」
- 小米(米友仁)
- 趙子固
- 宋徽宗「翎毛四段」
- 王庭筠「幽竹枯木図」
- 「唐宋名画冊」二本(盛蘋臣コレクション)(偽品が含まれてますが)と注記
- 以上四月二十八日付
- 「画中九友」(王南屏コレクション)
- 「溪山行旅」
- 「採薇図」
- 「牧牛図」
- 「觀潮図」
- 宋人「湖山清曉」
- 方從義「武夷放棹」
- 周砥「銅官山色」
- 盛懋「秋江待渡」
- 趙估(宋徽宗)「四禽図卷」
- 周遊コレクションの書法四点(ただし価格は安くなければなりません)と注記
- 余協中コレクション
- 吳普心コレクション(以上二コレクションは「行って見たことがありますか?」と聞くのみ、購入の指示とは言いきれない)
- 以上七月三十一日付
- 任月山「張果見明皇」

- 巨然
- 劉道士
- 「盤韻石」
- 「三馬図」
- 王蒙 「修竹遠山」
- 「採薇図」
- 以上八月二十五日付
- 李唐
- 李嵩
- 王蒙 「修竹遠山」
- 董源 「溪山行旅」
- 趙佶 「四禽図卷」
- 周砥 「銅官山色」
- 宋人 「湖山清曉」
- 方從義 「武夷放棹」
- 以上八月二十九日付
- 潘世茲 コレクション
- 丁惠康 コレクション：李唐、仇英
- 譚敬 コレクション
- 王南屏 コレクション
- 董源 「夏山図卷」
- 劉海粟 コレクション
- 袁体明 コレクション
- 周游 コレクション
- 陳仁濤 コレクション
- 余協中 コレクション
- 吳蘓孫 コレクション
- 張珍侯 コレクション
- 趙仲英 コレクション

- 吳子琛 コレクション
- 王文伯 コレクション
- 韓滉 「五牛図」(吳蘓孫コレクション)
- 梁師閔 「蘆門密雪」(余協中コレクション)
- 李公麟 「西園雅集」
- 馬遠 「踏歌図」(以上二点、周游コレクション)
- 李唐 「採薇図」(何冠社コレクション)
- 李唐 「晋文公復国図」(丁惠康コレクション)
- 王晋卿 「西塞漁社図」
- 趙昌 「花卉」
- 宋人 「盤古図」(以上三点、張大千コレクション)
- 趙孟頫 「三馬図」
- 趙孟頫 「三竹図」
- 趙孟頫 「双松平遠」
- 顔輝 「鐘馗」
- 朱德潤 「秀野軒図」(以上五点、周游コレクション)
- 王蒙 「惠麓小隠」(陳仁濤コレクション)
- 王蒙 「修竹遠山」
- 王蒙 「園林清集」
- 方從義 「武夷放棹」(以上三点、張大千コレクション)
- 仇英 「雅集図」(周游コレクション)
- 仇英 「職貢図」(丁惠康コレクション)
- 張遜 「双鈎竹卷」(譚敬コレクション)
- 巨然 「溪山蘭若」(袁体明コレクション)
- 以上九月六日付
- 十二月十五日付には具体的作品名なし
- 王蒙 「修竹遠山」(張大千コレクション)
- 馬遠 「踏歌図」
- 朱沢民 「秀野軒卷」(以上二点、周游コレクション)

- 。李唐「採薇図巻」
- 。小米「巻」
- 。趙子固「墨蘭巻」
- 。吳歷「墨井艸堂巻」
- 。曹知白「冊頁」
- 。仇英「竹院逢僧」(以上五点、王南屏コレクション)
- 。毛益「牧牛図巻」
- 。孫知微「江山行旅巻」
- 。商琦「秋山図巻」
- 。「棲觀觀瀑図」
- 。方方壺(方從義)「武夷放棹軸」
- 。李嵩「觀潮図巻」
- 。董源「溪山行旅図」
- 。王文伯コレクション
- 。王季遷コレクション
- 。李息齋(李衍)「竹巻」
- 。張萱「唐后行從図」(以上二点、盧芹齋コレクション)
- 以上十二月二十三日付
- 。王蒙「葛稚川移居図」
- 。王蒙「修竹遠山」(張大千コレクション)
- 以上十二月二十六日付
- 。王蒙「修竹遠山」(張大千コレクション)
- 以上十二月三十日付
- 一月二十九日付には具体的作品名なし
- 。盧芹齋コレクション「(盧芹齋がパリで危篤と聞ききました。彼のものを人に托して購入できないでしょうか?)とある」
- 。王南屏コレクションの画二点(ただし「価格が非常に高い。もし明清画を加え、文彦博、王晋卿の書巻を加えるなら、二十五万で購入してもいいでしょう」と、条件をつけている)

- 以上二月十九日付
- 不購入を指示したもの
- 。譚敬コレクション三点(値上りのため)
- 以上四月二十八日付
- 。徐伯郊が手紙で提示してきた王詵、錢選、王蒙、方從義、張孔孫、郭天錫、王冕、宋艷々の画(信用できないため)
- 以上七月三十一日付
- 。「盤古図」(張大千による偽作かも知れないため。ただし、「注意を要します」と言うのみで、不購入とは言い切っていない)
- 以上八月二十五日付
- 。王蒙「林泉清集」(張大千コレクション)(信用できないため)
- 。趙氏「三代人馬巻」(問題があるため)
- 。王振鵬「丹台春曉図巻」および黃筌「梨花山鵲軸」(偽品のため)
- 。「行襪帖」
- 。梅花道人(吳鎮)「密光送爽図」(偽品のため)
- 。王詵、石恪および某軍人コレクション(信用できないため、ただし「十分慎重に考慮し、仔細に研究せねばなりません」と付け加えており、不購入とは言い切っていない)
- 。錢選「楊妃上馬図」(盧芹齋コレクション)
- 以上十二月二十三日付
- 。王蒙「林泉清集」(張大千コレクション)(偽品のため)
- 以上十二月二十六日付
- 。王蒙「林泉清集」(張大千コレクション)「絶対に広州に持ち帰ってはなりません」と念を押している)
- 以上十二月三十日付
- 鄭振鐸はまた、九月六日付の手紙で、
- (一) 「古画」を購入することを主とし、古画の中でも「宋元人」の画を購入することを主とする。
- (二) 碑帖、法書(字)はしばらく購入しない。



(三) (書画以外のことなので省略)

と、書画購入の基準を簡条書きにして確認している。

すなわち、鄭振鐸は、自らの鑑識眼をもって、「信用できないもの」や「偽作」「偽品」を排除した上で、宋元の画を中心として徐伯郊に購入を指示し、書法には「二希」を除いてあまり触手をのばそうとはしなかった(たとえば王羲之「行穰帖」は摹本ではあるが清宮旧蔵の名品である。だが、鄭振鐸は不購入を指示している)。この鄭振鐸の方針は、基本的には妥当なものであると思われる。国家のため、そして人民のための大局的見地に立った慧眼だと賞賛するむきもあることだろう。しかしながら、筆者は鄭振鐸のこの方針が妥当なものであったことは認めつつも、これが百パーセント国家のため、人民のためだけに立てられた方針だとは考えてはいない。つまり、鄭振鐸は徐伯郊への書画購入指示に、ある種の「私情」を交えていたと考えているのである。

#### 四、鄭振鐸が交えた「私情」

「私情」を交えたなどと言うと聞かえが悪いが、筆者は決して鄭振鐸を批難しているのではないことをまずことわっておかねばならない。なぜなら、この「私情」とは、悪い意味での私利私欲からきたものではないからである。この「私情」とは何かを説明するにあたっては、まず当時の鄭振鐸の動向を確認しておかねばならない。

鄭振鐸が徐伯郊に与えた十三通の手紙のほとんどが一九五二年に出されたものであると考えた方が辻褄が合うことは前述の通りであるが、実はこの一九五二年ごろ、鄭振鐸には、この香港流出文物購入の他に、今一つ熱中している事業があった。それは、絵画を中心とする中国の美術(書法は含まれていない)を年代順に集大成した『偉大的芸術伝統図録』(一九五二年八月初版・上海出版公司/以下『図録』と略称)の編纂である。この『図録』は、計十二輯、図版百五十八頁という壮

大なもので、鄭振鐸の力の入れようは相当なものであった。そして鄭振鐸を助け、『図録』出版に力を尽したのが上海出版会社の責任者であった前出の劉哲民で、『書簡』には、当時、鄭振鐸が劉哲民に与えた手紙が多く録されている。まず、一九五一年七月十三日付の一節を見よう。

連日極めて忙しくしております。……(中略)……少なくとも、三つか四つある比較的重要な仕事があり、まだ完全には終わっておりません。『芸術伝統』(『図録』のこと)も、その中の一つで、これはどうあっても完成させねばなりません——少なくとも「宋代」の一部分までは。

鄭振鐸の『図録』に対する熱意と、「宋代」以前の重視が窺える。また、同年九月七日付の手紙には、

『芸術図録』第一輯の原稿十枚、すでに受け取られましたか?心配しております。徐伯郊兄は十二日に上海へ向かう予定です。第二輯から第七輯の原稿は、彼に持って行ってもらわねばならないでしょう。

とあり、この『図録』編纂事業にも徐伯郊が骨を折っていたことがわかる。また、同じ手紙の後半部には、

「題字」はすでに周(恩来)総理に書いていただくようお願いしました。とあり、鄭振鐸の並々ならぬ意気込みと、『図録』に対する自信が感じられる(ちなみに、周恩来多忙のため、題字は郭沫若が書くことになった)。

当時の鄭振鐸の興味は完全に美術に向いており、ひいては出版によって美術を世に紹介することに向いていたようだ。同年十月五日付の手紙には、

(インドに向かう)船の上では、大いに出版の計画を練ることができるとしよう。もし美術書を出版することを主とするなら、前途には大いなる希望があります。

と書き、同年十二月二十七日付の手紙では、

弟<sup>たかし</sup>がインドで購入した大量の書籍は、その多くが美術、考古に関するものです。

と書いている。更に一九五二年一月十三日付の手紙では、

私は『世界美術全集』を編むつもりであり、集めた“材料”も少なくありません。ただ販路がありますでしょうか？少なくとも二十四冊（あるいは四十八冊）を二年に分けて出し、銅版および三色版で印刷します。おそらく原価は非常に高くなるでしょう。でも販路は決つたとあるはずで。

と、はや次の一層壮大なる出版計画を書きつづけている。ここで注目したいのは、出版計画を練るにあたって鄭振鐸は、販路や原価コストに気を遣っており、出版を編著者側のみから見ず、出版業者側からも見ていることである。これは鄭振鐸が一九二一年から一九三一年まで、つまり二十四歳から三十四歳までといういわば社会人としての自我形成期を、商務印書館という花形出版社で過したことが大きく関わっているであろう。この『世界美術全集』出版は、結局実現しなかったのであるが、原来が出版人である鄭振鐸の出版計画はこの当時、次々と打ち出されている。同年二月十二日付の手紙には、

私達はちょうど一つの刊行物を編むことを考えています。これは専ら“文物”の図片を載せるといふもので、新出土および未発表のものを中心とし、説明を少し加えます。

という一節があるが、この鄭振鐸のアイデアが後の月刊誌『文物』（文物出版社）になったとのことである。

さて、話を『図録』に戻そう。同年二月二十一日付の手紙には次のような一節がある。

『図録』には比較的珍しく、他では見れず、まだ印刷に付されていない材料を採用できれば最も良いでしょう。これは精神的にも肉体的にも骨が折れることで、時には自分で購入できるなら、これが最も手っ取り早いことがあります。ですが、価格はこれまた非常に

高く、力およびません。それでこの上なく躊躇しております。もし余力があり、少々多めに現金を送って下さるなら、それをこのことにあてたく存じます。近ごろは絵画の価格が、比較的低落しているのです。ですが、これは幻想あるいは理想にすぎません。あれこれ考えても、最終的にはやはり実物を買わないことが上策なのでしょう。買えば、また資金の滞りがぐっと多くなってしまうからです。やはりなんとか（『図録』に載せるための絵画を）借りることにしましょう。

くり返しになるが、この手紙は、一九五二年二月十二日付のものである。すなわち、鄭振鐸が徐伯郊に命じて香港流出文物購入を行わせていたまっ最中に書かれたと考えて良い手紙であり、この手紙の一節、およびこれまでにあげた手紙の内容から、筆者が前に提示しておいた鄭振鐸の“私情”がはっきりと窺えると思われるのである。つまり、この当時の鄭振鐸の動向をまとめてみると、

- 。香港流出文物購入と同時に進行の形で、『偉大的芸術伝統図録』という絵画を主とする美術全集を編纂していた。
- 。『図録』編纂に並々ならぬ熱意を示し、徐伯郊もこれに協力していた。

。原来が出版人であるためか、自らの最大の興味の対象であった美術を、集大成的出版によって世に問うことをいわば生きがいとしていた。

- 。熱情を注いでいた『図録』を少しでも良いものとするため、未発表の図版を必要としており、できれば図版用の絵画を買いたがっていた。

となり、つまるところ、

。徐伯郊に命じて行なわせていた香港流出文物購入における鄭振鐸の指示には、『図録』編纂のため必要なものが最優先された。という結論が導き出されるのではなかろうか。香港流出文物購入は国家の事業であるが、『図録』編纂は、国家発揚の作用があったとは言

え、あくまで鄭振鐸の個人事業である。もし個人事業の都合を国家事業に及ぼしているとすれば、これはとりもなおさず“私情”を交えたことに他ならないのではないか。こう考えると、書法が含まれない『図録』編纂のまっ最中であつた鄭振鐸が、王羲之「行穰帖」をあえて購入しなかつたこともうなづける。

ちなみに鄭振鐸はそもそも書法にはさほど興味がなかつたようだ。『図録』に書法を採り上げなかつたことからこのことがはっきりと窺えるし、一九五二年六月二十七日付の手紙には、

“小雅図”は“字”を写真に撮る必要はありません。画だけでけっこうです。

という一節があり、書法の存在価値をほとんど認めていないようにさえ思われる。こんな鄭振鐸の書法不重視が、結果的には現在の北京故宫博物院に“二希”以外の国宝級書法作品が見あたらないという状況を招いたことは否定できない。

ただ、今一度くり返すが、筆者は基本的には鄭振鐸の香港流出文物購入事業における姿勢を批判しようとは思っていない。なぜなら、なんといつても当時は国宝級の文物が多く香港で商品となり、外国へ今にも流出しようとしている非常時なのであるから、文物購入のターゲットを絞り込むのは当然のことであるし、その絞り込みにより、書法より絵画を、そしてなおかつ宋元以前の絵画を優先することは極めて妥当な判断と言う他ないからである。

## 五、香港流出文物購入事業の源動力

鄭振鐸は香港流出文物購入に、『図録』編纂のための“私情”を交えた。だがその“私情”は結果的には誰にも迷惑をかけなかつたし、鄭振鐸が私腹を肥やしたわけでもなかつた。さすれば、この“私情”はあつた方が良かった性質のものなのかも知れない。もしこの“私情”がなければ、鄭振鐸はこれほど熱心に香港流出文物購入に取り組

まなかつたかも知れないからだ。つまるところ、この“私情”は香港流出文物購入事業の源動力となつていたのである。その証拠に、一九五二年五月十九日付の手紙に、

『図録』の編集作業は、今日の午前で“功德完満”となりまして、心からうれしく思っています。

とあり、『図録』の編纂が完了したことがわかるが、そうすると香港流出文物購入事業の源動力もなくなつてしまふのか——と思いきや、鄭振鐸はちゃんと次の源動力を用意していた。つまり『偉大的芸術伝統図録統集』（以下『統集』と略称）の編纂である。『書簡』にはじめて『統集』の名が見えるのは、『図録』編纂完了を告げた手紙にひきつづいてすぐ出された同年五月二十一日付の手紙で、鄭振鐸の源動力の希求が窺えておもしろい。それからしばらく『統集』の編纂計画を熱っぽく述べた手紙が続き、同年九月十八日付の手紙には、

すでに洪深先生と話し合つたのですが、来年『統集』が出されたなら、彼等はこれまでと同じように、若干部を予約してくれるそうです。このようにしていけば、『統集』の計画を進めて行くことができるでしょう。ここ数日、手に入れた唐宋元の名画真跡は極めて多く、心からこの上なくうれしく思っております。あるものはこれまでの“著録”に見えないものではありませんが、大多数はやはり溥儀が持ち出した故宮のものです。

と、うれしさのあまりか、とうとう『統集』編纂と香港流出文物購入が連動していることを漏らしてしまつてゐる。これは“私情”が香港流出文物購入事業の源動力となつてゐたことを物語る何よりの証拠であらう。

## 結びにかえて

本稿で述べたかったことは、鄭振鐸という近代中国を支えた一人の人物が、香港流出文物購入という大事業を進めるにあたり、原来が

版人であったことからくる「私情」を交え、その「私情」を源動力とすることにより、はじめてこれを遂行し得たのだ——ということに過ぎる。ただ、このことを述べるにはどうしても、まずはさまざまな面から当時の状況および背景を説明しておく必要があったため、これにスペースがさがれすぎたきらいがある。しかしながらこれはいたしかたがなかった。

筆者は個人的に鄭振鐸という人物が好きである。いつまでも純粹さとひたむきさを忘れない彼の人間性に魅かれるのだ。ただ、筆者は鄭振鐸を神格化することには反対したい。神格化とは、「すべてを国家、人民のために捧げた」といった評価のしかたをすることをここでは指す。鄭振鐸は働きざかりの頃、共産党政府の成立という大転換期を迎え、そしてこの政府に参加し、大いなる働きをしたため、どうしても当時の共産党政府がやりがちだった神格化の洗礼を受けてしまったように思う。この神格化の洗礼を一度受けてしまうと、もうなかなかこり固まったイメージを打ち壊せない。だが、筆者は人物論をもつするならば少しでも生身の人間像に迫るべきだと思っているので、作意的な神格化されたイメージは打ち壊すべきだと強く主張したのである。

そんな考えのもとで本稿を書いてみた。つまり、鄭振鐸が国家のため、人民のために香港流出文物購入事業を推し進めたことは彼自身も述べており、確かなことなのであるが、彼は決してそれだけのためにこの事業に熱中したのではなかったのである。鄭振鐸には出版人の熱き血が滔々と流れており、その血のさわぎはあくまで鄭振鐸という個人の欲求を満たそうとするものであったのだ。もしかしたらこのことは彼自身も気付いていなかったのかも知れない。だがそれはどちらでもいいことであろう。とにかく筆者は、鄭振鐸が国家のため、人民のためだけでなく、自分のために一つの事業に熱中した部分を持っていたことを発見して安堵し、そしてますます彼のことが好きになったのである。

(注)

(1) このことについては、台北故宫博物院の元副院長であり、かつては莊嚴の部下であった李霖燦が『山堂清話』序の中で、「(宣統帝溥儀は)あわてて宮廷を出る際に、守備兵によって彼の蒲団包みの中から、非常に有名な「国宝」を振るい落とされた。すなわちそれが三希堂中第一の宝物である王羲之の快雪時晴帖である」と更に詳しく述べている。

(2) このことについて、宋路霞・舒康鑫『国宝守護神徐森玉』(一九九二・『上海灘』第八期初載/同年九月二十一日〜九月二十九日付『人民日报海外版』連載)は、「そもそも、「二希」は光緒帝の寵妃であった瑾妃が、故宮後門外の「品古齋」という小さな骨董店に売ったもので、郭世五はそこでこの二点の国宝を得たのである」と述べており、莊嚴のいう宣統帝の庶母(父の側室)とは瑾妃のことであり、その瑾妃が、「二希」を売った店が「品古齋」という名であったことを教えてくれている。

(3) 「二希」購入の経緯について、陳福康『国宝的回憶』(一九九二年七月二日付『文学報』第五八八期所収)は、「一九三七年春、郭某(郭世五)は「二希」にその他四幅の書画を加え、二十万円で売りに出したが、抗日戦勃発のため、売ることができなかった。抗日戦勝利の後、郭某はすでに死んでおり、その子の郭昭俊が三千万聯幣(黄金千兩に相当する)で、「二希」を売りに出そうとしたが、後、国民党政府行政院長の宋子文の目にとまり、郭昭俊は「二希」を賄賂として宋子文に贈った。よって宋氏は郭に十萬米ドルを褒美として与え(表面的理由は、郭が故宮博物院にひとまとまりの古瓷器を寄贈したというものであった)、あわせて郭を中央銀行北平(北京)分行襄理に任命したのである。だが間もなく、このスキャンダルが世に漏れ、宋氏は世論を恐れて、やむなく「二希」を郭に返した。そして北平解放の直前、郭は「二希」を携えて香港に行き、イギリスの某銀行に借金の担保として差し出したのである。それからまたたく間に借金の返済期限がやってきたが、郭は借金を返済して担保を請け出すことができず、「二希」は競売にかけられることになった……。彼(鄭振鐸)は、この情況を知り得ると、崇高なる責任感に駆りたてられ、早速(香港から)国内に報告し、同時に徐伯郊に指示して郭氏と協議させて郭氏を落ち着かせ、あわせて銀行に対して三か月あるいは半年、返済期限を繰り越させた上で、内地からの為替送金による緊急措置を待った。彼は知っていた。本年度中はおそらく文化部がこのような大金を支払えないであろうことを。だが、これは緊急事態

であり、彼は周（恩来）総理が必ずやこれを採り上げ、手立てを講じてくれると信じていた。果して、周総理自らの心配りおよび決定のもと、国家は代価を借しますこの「二希」を購入し、（北京）故宮博物院に帰さしめたのである」と述べており、また、注（2）で紹介した宋路霞・舒康鑫『国宝守護神徐森玉』は、「五十年代、郭世五の息子である郭昭俊は、「二希」を携えて台湾に行き、これを台湾故宮博物院院長（副院長の誤り）の莊敏に高値で売ろうとした。当時、台湾の経済は低迷しており、財源に乏しかったため、「二希」を購入する力はなかった。よって郭昭俊は香港へ赴き、これを担保として銀行から金を借りたのである。この時ちょうど、徐森玉の長男である徐伯郊が広東省銀行香港分行で経理をつとめており、すぐにこの宝物に目をつけ、あわせて時を移さず父と鄭振鐸先生にこのことを知らせた。そして徐森玉、鄭振鐸の二人は、すぐさま周総理の耳に入れたのである。周総理はことのほかこれを重視し、自ら報告の中で、「真の文物を買うべきであり、骨董品はいらない」という考えを示し、あわせて政務院から特にこのために費用を支給し、「二希」を購入するのみならず、他の香港に流出していた貴重な文物をも、力を尽して購入するよう指示を出したのである。政務院はこの重要任務を徐森玉、徐伯郊父子に委託した。後、「二希」は徐伯郊によってマカオにもたらされ、国家文物局副局長・王治秋、故宮博物院院長・馬衡、そして徐森玉が上海からマカオに赴き、実物を見て鑑定し、価格を定め、三十五萬元人民幣（香港ドルの誤り）で取り引きが成立した」と述べている。